

地域リーダー研修（2月26日）

午後の部

見守りが必要な人の生活を、  
地域と支えていくために

リ・ケア向ヶ丘地域包括支援センター 堀内 亜希子

# 地域包括支援センターについて

- ▶ 地域で生活する高齢者（65歳以上）やそのご家族の相談窓口。
- ▶ 高津区内に7か所あり、担当の地域ごとに相談業務を行っている。
- ▶ 相談を受ける内容は、介護、福祉、医療などについて。
- ▶ ご家族から「最近物忘れが出てきたようで心配」、本人から「足腰が弱って困っている」などと相談がある。ときどき地域住民から「近所に住んでいる方が心配」と相談を受けることもある。
- ▶ 病院の相談室から、入院時に介護申請の相談があったり、退院時にケアマネを探したりサービス調整をしたりとの相談がある。
- ▶ 担当地域内で要支援認定を持っている方の、ケアマネジメントを担当する。
- ▶ 担当地域で行われている**地域活動**の支援を行っている。

# 地域活動の紹介

## 「ほっとの会」

- ▶ 場所：上作延第2住宅 集会所にて
- ▶ 日時：毎月第3火曜日 13時から14時
- ▶ 開催メンバー：元民生委員、現民生員、その他団地の方たち 6名
- ▶ 参加者：上作延第2住宅の住人で65歳以上の方。12, 13名程度出席。
- ▶ 活動内容：開催メンバーが毎回内容を考えて、レクリエーションなどを行う。前半に包括職員がお話をしたり、簡単な体操をしたりする。（15分程度）以前は飲み物やお菓子、漬物などを持ち寄って、お茶の時間があったがコロナ禍になってからは、飲食は持ち帰りとなっている。また、歌の時間があったがそれも今は行っていない。
- ▶ 活動立ち上げの経緯：団地に老人会がなく、以前隣の市営住宅でふれあい会というサロンを月に1回開催しており好評だったため、第2住宅の民生委員を中心に第2住宅でもサロンを作ろうと声掛けをして、活動が始まった。
- ▶ 月に1回来ているメンバーのことを、開催メンバーが見守りをしており、最近元気がない、様子がおかしいなどの情報交換を常に行っている。ここで話題になった方については包括に連絡があり、いっしょに訪問したり情報収集を行ったりしている。

# 事例の紹介：独居のXさんについて 民生委員より相談

- ▶ 団地に住むXさん（女性） 独居 70代
- ▶ 公園体操の代表をしていたが、体操の旗を出すのを忘れて、遅れて来たりということが続いて、体操に参加していた民生委員から包括に相談。
- ▶ 包括職員が民生委員といっしょに訪問。
- ▶ 本人「リウマチの痛みがひどくなり、公園体操以外の今までの地域活動は全て辞めた。公園体操は行かないときは**みんなが呼びに来てくれる**し、続けようと思う。家事や買い物にはなんとか行けているので介護申請までは必要ない」
- ▶ 物忘れの症状について、本人と仲の良かった以前の民生員の方がいっしょに**街ぐるみ認知症相談センター**へ行ってくれたが、質問によく答えられて認知症という段階ではない、様子を見ましようという結果だった。
- ▶ その後とりあえず介護申請して要支援の認定結果が出たが、本人は「まだだいじょうぶ」を繰り返して、サービス利用につながらず、認定期間も過ぎてしまった。公園体操は、旗を忘れて、呼びに行ったりしている状態が続いていた。

## 事例の続き：介護サービス利用につながるまで

- ▶ しばらくして、団地の住人（Aさん）から「Xさんに買い物をしょっちゅう頼まれて困っている」と民生委員あてに相談。
- ▶ 包括職員と民生委員とで訪問を再開。Xさんは「何も困っていない。自分で買い物も出かけている」と言うが、実際は出来ておらず、Aさんにも立ち会ってもらって、「Aさんが困っているから」と介護申請につなげた。
- ▶ Xさんはリウマチの痛みと認知症が進んでおり、**数か月間通院できていなかった**ため病院受診に同行するところから支援を開始した。Xさんの拒否が強く、受診を予約しても「今日は具合が悪いから行けない」と断られて何度も受診できず、なかなか進まなかった。
- ▶ 周りの地域住民があきらめず、「あの人はどうなっているの？」と何度も何度も催促があり、包括職員もあきらめずに関わりを続けることができた。
- ▶ 介護認定につながり、Xさんは介護サービスを利用するようになり、服薬もできてリウマチの痛みはかなり落ち着き、認知症があるが安定した生活を送ることが出来るようになった。相談があってから、サービスの利用を開始するまで**4年9カ月**かかった。
- ▶ Xさんの認知症が進んでお金の管理ができなくなってしまい、息子がいたが事情があって親と全く関わりを持たなかったため、区役所と連携して成年後見人の申請を行い、今は保佐人がついて在宅での生活を続けている。

# 気付きのポイント

- ▶ 「**体操の旗を出し忘れたり、時間になっても来ないことがある**」と、ご本人の様子が変わってきたときに、公園体操のメンバーが包括に相談してくれた。地域活動に参加していたことで、周囲が早めに気付くことが出来た。
- ▶ 物忘れの症状があったが、初期の段階では検査等でもはっきり結果が出ないことがある。実際の本人の様子を見ていくことが大切。同居のご家族などいない方の場合、**地域活動**は見守りをしてもらう機会となる。
- ▶ 「**ひとり暮らしの方の医療機関の受診が止まってしまった時や、薬の受け取りに来なくなってしまった時**」に、包括では気づくことが難しい。病院や薬局の方は、そのような方を把握することが可能か？把握した場合、どのような対応方法が考えられるか？

# 地域活動の中で、気になる人、見守りが必要な人を把握した時にどうしているか。その際の課題について 1

- ▶ 包括で気になる人や、見守りが必要な方の相談を受けた際に課題になるのは**本人あるいは同居の家族などから拒否がある場合**。
- ▶ →包括では、本人以外の方からの相談の場合、「どこかから相談があった」という情報は**守秘義務**として、本人にはお伝えしない。民生委員さんといっしょに（包括単独の場合もある）「地域の高齢者の健康チェックで回っています」などと言って訪問する。
- ▶ 「元気です。何も困っていることはありません」などとあっさり断られてしまうことが多い。何度か通ったり手紙を入れたり、地域の活動（サロンや公園体操など）を紹介したりして**関係を作っていく**うちに「実は困っている」というお話を本人からしてもらえると、支援につながる。
- ▶ ※緊急性が高い場合は時間をかけたりせず、行政に相談したり、個別ケア会議を開いたりなどして、介入の準備をしていく。また、最近では本人以外に同居の家族にも課題がある（障害がある、ひきこもっているなど）場合があり、複合的な課題のケースの場合も、行政や他の期間と連携して対応している。



# 地域活動の中で、気になる人、見守りが必要な人を把握した時にどうしているか。その際の課題について 2

- ▶ 包括は相談を受ける側になるが、地域の方や、多職種の方から「**包括のことを知らなかった**」「**どこへ相談したらよいかわからなかった**」と言われることがまだまだ多い。
- ▶ 包括のことが知られていない？
- ▶ 包括の敷居が高い、相談しにくい？
- ▶ 包括以外にも相談できるところやつなげるところがあるとよい？